

## 人生を導く杖

〔聖書〕出エジプト記32章1～6節

モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」と言うと、アロンは彼らに言った。「あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。」民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鑄像を造った。すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、「明日、主の祭りをを行う」と宣言した。彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物をささげ、和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。

### 〔序〕シンガポール訪問

私たち夫婦は、去る 8 月 27 日の夕方牧師館を出発し、羽田空港の近くの大井教会の牧師館で一泊。翌朝 11 時 30 分発の便でシンガポールを訪れました。国際日本語教会員の峯村さん夫妻のお宅に滞在し、土曜夜は教会のバーベキューパーティー、日曜の礼拝の他に伊藤世里江牧師と今後のことについてゆっくり話し合いました。旧くからの信者の母親と息子二組の相談相手にもなりました。

土、月、火、水には二つの大学の剣道部とシンガポール剣道会の稽古に参加して旧交を暖め、火、水の夕方には大学の日本語の三つのクラスの授業で、日本文化の紹介として剣道を披露しました。また峯村さんの経営する幼稚園の二つを訪ねて、お祈りをさせて頂きました。地元のジェyson 牧師には、マレーシアに近いジョホールの国立墓地に連れて行ってもらいました。シンガポールのために戦死した 25000 人の兵士の墓地です。こうして充実した毎日を送り3日木曜の夜にシンガポールを発ち、4日金曜の朝9時に無事帰宅しました。

喜美子も体調に合わせて女性同士の交わりを楽しみました。峯村さんがビジネスクラスのシートをとってくださり、身体を横にしての飛行機旅でしたので、喜美子も疲れずに済みました。こうして二人とも無事に8日間の旅行が出来ました。皆さまのお祈りを心から感謝いたします。

### 〔1〕 金の子牛

さて今日は出エジプト記第 13 回目の学びです。エジプトの奴隷にされていた約 150 万人のイスラエルの民が、神の導きによって奇跡的に脱出して、先祖のアブラハムが神から与えられた約束の地カナン目指して、大移動を始めた記録です。3ヶ月目にシナイ半島の南部に位置するホレブの山の麓に到着しました。

神はモーセを山上に召して、神の民として生きる基本的な掟(十戒)を授けました。モーセは山か

ら下りて民を集め、それを読み聞かせました。民は皆、声を一つにして答えました。「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」(出エジプト記 24:3)。

神は再びモーセを山上にお召しになり、神の幕屋の作り方と祭司の務めなどの指示を、細かくお与えになりました。ところが麓でモーセの帰りを待っていた民は、彼が40日たっても戻って来ないので、不安を募らせアロンに迫りました。

「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったか分からないからです」。アロンは、皆の金の耳輪を集めて若い雄牛の鑄造を造りました。すると民は「これこそエジプトから導き上った神々だ」と喜び、祭壇を設けて礼拝を捧げ、飲み食いし戯れたのでした。

アロンともあろう人が、どうしてこのようなことをしたのでしょうか？ 恐らく彼は、この金の鑄造を足台として、神がその上に臨んで下さることを示すシンボルにしようと考えたのでしょう。しかしそれはアロンの見込み違いでした。民は皆、金の子牛を神のシンボルとしてではなく、「これこそイスラエルをエジプトの国から導き上ったイスラエルの神だ」と受け取ったのです。牛は力と多産の象徴として、古代近東諸国では、神として祀られていましたから、イスラエルの民もそれを知っていたのです。

彼らはアロンに言いました。「エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったか分からないからです」。エジプトから彼らを導き出してくださっているのは、主なる神です。その神の言葉をモーセが聞き取って、アロンをスピーカーにして、民に伝えて来ました。

しかし民は、いつも神の言葉を取り次ぐモーセを目で見えていました。そして彼を見ることで神を見ていると思うようになり、モーセが導き出してくれていると受け取るようになっていたのです。主なる神の導きの業なのに、モーセしか見えていない。そのモーセが見えなくなったので、目に見える導き手の神を求めたのでした。

## [2] いかなる像も造ってはならない

主なる神がモーセを通して民に命じられた掟(十戒)の第二「あなたはいかなる像も造ってはならない」。神の像を造って拝んではならないという命令です。何故でしょうか。第一の理由は神を像に表わすことが出来ないからです。パウロは哲学の都ギリシャのアテネで、哲学者たちにこう語りました。「世界とその中の万物を造られた神が、(人の)手で造った神殿などにはお住みになりません。また何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです」(使徒17:24～25)。

そうです。世界をお造りになった神を、このちっぽけな私の手の中で造れるはずがありません。人が造った像を神だとして拝むならば、神ではないものを神として拝むことになります。また神は、私たちに命と霊をお与えになった方ですから、造られた一切のものとは全く質を異にします。どんな

被造物によっても表すことは出来ません。

なぜ神を像に造って拝んではならないのか。第二の理由は、像は言葉を語らないからです。聖書が教える真の神は、私たちに言葉をもって語りかけるお方です。ところが像はたとえどんなに芸術的に優れた作品であろうとも、ものを言いません。この点で神を表わしていないからです。

以前に釧路の丹頂鶴自然公園で 30 年間鶴を守り育てている高橋さんの記録をご紹介します。卵を抱かなくなった親鳥に代わり人工孵化器で卵をかえす秘訣 ——それは最後の 10 日間、卵に向っての言葉かけでした。卵に向かって 10 日ほど言葉をかけ続けていると、卵の内側からコツコツと応答が始まります。雛が内側から殻をつつき始めたのです。そして遂に殻が割れだします。でも体がすっかり出てくるまで、それから6時間かかります。手を貸して割ってやると 弱い鳥になって育たないそうです。それで高橋さんはただ言葉をかけて励まし続けます。最後の 10 日間、言葉かけをしない卵は、他の条件をどんなに工夫してみても、雛に孵らないのだそうです。

丹頂鶴ですら、言葉を語りかけられなければ命は誕生しないのです。ですから 神は私たちに、何をさておいても、言葉をもって語りかけてくださるのです。 私たち人間は神から愛の言葉をかけられることによって愛の命が生まれ、人格が形成され、人間になっていくのです。神の語りかける命の言葉を絶えず聞き続 けていくことを、何よりも大切にしなければなりません。

金の子牛はものを言いません。預言者エレミヤは人の手で造られた偶像をこう言っています。「金銀で飾られ 留め金をもって固定され、身動きもしない。きゅうり畑のかかしのようで、口も利けず 歩けないので、運ばれて行く。そのようなものを恐れるな。彼らは災いをくださすことも幸いをもたらすこともできない」(エレミヤ 10:4~5)

自分で歩けませんから、人に担がれて運ばれて行きます。丁度氏子に担がれる御神輿に乗って町内を練り歩く氏神と同じですね。口も利けませんから、指示を与えることも出来ません。ですから担ぎ手が次第にしゃべり始め、自分たちで行く道を決めて進むようになります。

エジプト脱出に当たって、神はイスラエルを近道のペリシテ街道には導かれず、荒れ野の道を遠く南に遠回りする道を命じられました。そして神は、葦の海の中に水を分けて道を開き、大集団を脱出させると、追跡して来たエジプト の精鋭部隊を海中に沈めてしまわれました。物言わぬ金の子牛を担いで先頭を進む者たちが、このような旅路を進むことが、果たして出来たでしょうか。

偶像は、人間の思惑に引き回されて進む神です。罪深い人間が我欲を満たすための信心。これでは自滅をもたらす信仰です。「あなたはいかなる像も造ってはならない」と神が断固としてNO！とおっしゃったのは、当然のことでした。

## [結] 礼拝を守る恵み

神は目で見て信じるお方ではありません。神のみ言葉を聞いて信じるのです。使徒パウロは「実に信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」(ローマ 10:17)とはっきり言っています。私たちは、聖書を神の言葉と信じて読み、その中心であるイエス・キリストの言葉から、神の語りかけを聞き、その言葉に従って生きていくのです。

目に見えるもの、形に現されているものは、やがて消えていくものです。真のもの、永遠なるものは、目に見えないものです。ですから私たちは、神を見ることはできません。神の真実の言葉は、聖書を読むことによってしか聞くことが出来ません。そして目に見えない真実の神に目を注ぎ、信じて従うのです。

モーセを頼りきっていた民は、モーセを失うと、偶像を造り、神の怒りを受けました。私たちも、特別な人に頼らず、自分で神の言葉を聞いて従う信仰を持たなければなりません。聖書が証している救い主キリストの言葉を聞いて、神の御心に従って、生きる者になりましょう。

モーセは全能の神が今、自分たちをエジプトから救い出して、カナンの地に導いて下さって居るという信仰に固く立ち、神の指示に聞き従いました。エジプト人の意志に引き回されて生きていく奴隷生活ではなく、神が備えてくださった地で、神の民として生きていく原点に戻るためでした。

私たちも人生の旅路を進んでいます。私たちも先ず人生の目的地を、信仰をもってしっかりと定めなければなりません。またその目的地への道筋を、どのように決めて進んでいるのでしょうか。なるべく苦勞の少ない近道を選ぼうとしがちです。モーセは遠回りの道、しかも荒れ野の道を進みました。しかし主なる神が先立って進み、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって導いて下さいました。神が共にいて下さり、導いて下さる道を進むことが、何よりも大切なのですね。

私たちも週の初めの日曜日に、このように礼拝を守っています。私たちの歩んでいる人生の旅路が、正しい目的地を目指しているかを反省する時です。また新しい一週間の歩みが、神の導きに従うものであるように、信仰を新たにする時です。私たちの一步一步を、雲の柱、火の柱の導きのもとに進めることが出来るように、全能の主なる神に祈り求めて、出発する時としたいものです。

お祈りします：神さま、貴方は歴史の先の先まで見通しながら、私たちを導き、本当の祝福を与えてくださる全能の主なる神さまであることを感謝します。私たちに、聖書から貴方の命の言葉を聞き続ける信仰をお与え下さい。私たちの人生の旅路においても、それが海で行き止まりとなる荒れ野の道、遠回りの道であろうと、あなたが共にいて導いて下さる道を進み続ける者にして下さい。主の御名によって祈ります。アーメン